

Research Paper Series

No. 41

『推し、燃ゆ』カスタマーレビューの考察

水越 康介†

2022年10月

『推し、燃ゆ』カスタマーレビューの考察

水越康介

東京都立大学

1.目的と分析対象	1
2.参考になった人の数が多いレビュー	2
3.出現頻度傾向.....	4
4.「障害」に対するレビューコメント	5
5.発達障害と推し	6
6.二つの病気	7
7.別のネット記事にみる病と推し活.....	8
8.帰結	9

1.目的と分析対象

近年、応援消費という言葉とともに、推し活や推し消費という言葉が用いられるようになってきている(水越, 2022ab)。この推し活や推し消費という言葉について特に話題になったのは、小説「推し、燃ゆ」である。「推し、燃ゆ」は、宇佐見りんによる小説であり、2020年7月に『文藝』秋季号にて発売された。第164回(2020年度下半期)芥川龍之介賞を受賞し、2021年5月までに50万部を売り上げている(PRTIMES)。タイトルの通り、推しに関する内容となっており、推し活や推し消費に関する新聞紙面上でも度々取り上げられてきた。

推し活や推し消費とは何であるのか。人々は、推し活や推し消費を何であると考えているのか。これらを考察するために、本研究ではカスタマーレビューに注目し、投稿内容の分析を行う。

2022年6月27日時点において、本書籍にはアマゾン上で2988件のグローバル評価がついている。評価の内訳は、星5が43%(1285件)で半数弱を占め、星4が24%(717件)、星3が18%(538件)、星2は7%(209件)、星1は8%(139件)である。

このグローバル評価の中で、294件にカスタマーレビューが掲載されている。このうち、星1が20%(60件)、星2が13%(37件)、星3が17%(49件)、星4が21%(62件)、星5が29%(86件)であった。グローバル評価の場合は高評価の方が評価数が多くなっているが、カスタマーレビューがあるものに絞ると星1のレビューの割合が大きくなる。全体の割合からいえば、星1をつけた場合にはその約半数近く(43%)がレビューをつけ、一方で

星5の場合には、7%ほどがレビューをつけていることになる。また、タイトル文字数、レビュー文字数平均は、星の数が大きくなるにつれて増える傾向がみられる。それぞれのレビューに対して、「参考になった」としている人々は星1が最大で平均31.8人であった。

	グローバル評価個数	レビュー別個数	タイトル文字数平均	レビュー文字数平均	参考になった人の平均
星1	139	60	11.1	185.7	31.8
星2	209	37	11.8	202.8	13.1
星3	538	49	12.2	281.0	4.1
星4	717	62	15.0	376.0	14.4
星5	1285	86	14.6	281.4	19.4
平均			13.2	271.9	18.0

表1 カスタマレビューの概要

参考になった人の数の多さは、そのカスタマーレビューがどれだけ多くの人に見られ、また評価されたのかを示す一つの指標となる。最大は663人であり、星5評価、2020年9月に投稿されている。その次は483人、星は4点評価、2021年9月の投稿である。3つ目も星5が続き、その後に星1の評価に対し、参考になった人が226人、158人となっている。新しい投稿よりも時間が経った投稿の方が、値としては高くなりやすい点には注意が必要であるが、まずはこれらの内容を具体的に確認することから始めよう。

	評価	投稿日	タイトル文字数	レビュー文字数	参考になった人
1	星5	2020年9月11日	11	509	663
2	星4	2021年1月23日	47	3164	483
3	星5	2020年10月2日	8	376	324
4	星1	2021年1月21日	13	161	226
5	星1	2021年1月21日	2	43	158
6	星1	2021年1月23日	8	177	139
7	星1	2021年1月26日	4	87	126
8	星5	2020年12月11日	15	539	125
9	星1	2021年2月1日	6	45	120
10	星1	2021年1月27日	11	226	109

表2 カスタマーレビューに対する参考になった人の多い順

2.参考になった人の数が多いレビュー

まずは最大の663人から参考になったと評価された2020年9月の投稿である。この投稿は、最初に投稿された文章と、追記として後日追加されたと思われる文章の2つからなっている。こうした投稿は例外的である。投稿者の履歴を確認すると、他の書籍を含む書き込み履歴は8レビューであった。

レビューの内容は、星5として書籍の概要を紹介しながら賞賛している。自身はアイドルに夢中になった経験はないが、推すという行為だけに人生の意味を集約してしまう主人公の行動に共感できた。合わせて、追記では芥川賞を受賞したことが紹介されるとともに、自身にとっての最大の評価のポイントは、主人公が発達障害者であったということであるとされる。著者がこのことをちゃんと描いていることが評価の理由である。書籍の主人公あかりについて、書籍内では明示的に発達障害であるといった記述はみられない。ただ、そのように連想したというカスタマーレビューは多く、本書籍の一つの特徴となっている。またカスタマレビューの一つには、芥川賞授賞式において、著者自身が主人公を障害があるという設定にしたと述べたとも書かれている。

続いて多くの参考になった人を集めた星4の2021年1月23日の投稿は、ネタバレありますと書かれ、解釈を含むあらすじの紹介となっている。分量も多く、3164文字は本書籍に対するカスタマーレビューの中で最大である。ちなみに続く分量は、1680文字と半分程度になる。投稿者は他のレビューも多く手がけており、レビューアールランキングは1958位、書き込み履歴は212レビューであった。星4となっている理由は説明されていないが、タイトルにライト純文学とあり、この表現に評価が関係しているようにみえる。

レビューでは、あらすじの提示とともに、推し消費としていくつか興味深い記述がみられる。第一に、主人公あかりのアイドル上野真幸への没入的な応援は、主人公の内面を「背骨」のように支えているということである。この表現は小説内で実際に用いられているものであり、投稿者によれば、それはアイドルと自身の自己同一化、アイデンティティを保つことであるともされる。第二に、主人公にとって、そのアイドルは会話のツールでもある。逆にいえば、そのアイドルを挟まない他者とのコミュニケーションについては、主人公は困難に感じている。投稿者によれば、この感覚は主人公はもちろん、現代人の心理をうまく捉えているともされる。最後に第三に、主人公は身体的なもの、自分の存在に負担を感じる一方で、SNSやファンとしての推しとの距離に安心感を得ているということである。第一、第二の点とも関連して、推し消費が主人公の存在や生活において重要な意味を有していることがわかる。なお、この投稿でも主人公には詳細は記述されていないが適応障害かストレス性の何かがあるとされている。

3番目に参考になった人を多く集めた星5の投稿は、2020年10月2日に投稿されており、投稿者の書き込み履歴は34件である。この投稿では、自身の子供がいつも何を考えているかを知りたかったから購入したとある。この投稿でも主人公は発達障害として捉えられており、日常の描写がリアルであると評価されている。同時に、アルバイトや親兄弟から借りたお金での推し経済行動は日本独自の産業であるともされ、推し消費と経済や産業の結びつきに言及されている。

続く4番目から7番目までの投稿は、いずれも星1の評価である。このうち2つは書き込み履歴が1つだけであり、このレビュー投稿だけになっている。分量も多くはなく、芥川賞に対する疑問や、内容が少ないことが述べられている。一方で、共感はある、推しが全て、よくわかるといった記述もあり、推し消費という点では、そのような行動に理解は示されている。いずれのレビューについても、主人公の発達障害についての言及はない。

8番目は星5で、著者を賞賛する内容になっている。続く9番目と10番目は星1であり、先の星1の内容と基本的に変わらない。10番目の投稿では、著者と同じ世代で推し文化にも馴染みがあるとされている。世代と推しの関係、あるいは推しが一つの文化としてみなされていることを読み取ることができる。

3.出現頻度傾向

改めて各星ごとの単語の出現頻度を確認しよう。KHコーダーを利用して形態素解析を行い、名詞、動詞、形容詞などを含む単語の出現頻度を確認した。おおよそ上位20位までの出現頻度は表の通りである。大きく3つの特徴をみることができる。

一つ目は、「芥川賞」への言及である。低評価のカスタマーレビューでは、「芥川賞」への言及が高評価のカスタマーレビューに比べて多くみえる。1点では出現割合は35.0%(21件)、星2の場合も37.8%(14件)である。星3では26.5%(13件)となり、星4以降は上位20位には含まれず、星4で22.6%(14件)、星5点は17.4%(15件)となっている。カイ二乗検定では星5評価に統計的に5%水準の有意差が認められた ($\chi^2(4)=8.831$, Cramer's $V=0.173$)。すでにみたように、低評価の場合には芥川賞ということで読んでみたものという表現がよく用いられており、また芥川賞自体への批判もみられる。逆に高評価で出現した場合には、芥川賞にふさわしいことが語られている。

二つ目は、逆に高評価の方が出現割合が増えていく単語として「主人公」を確認することができる。「主人公」は、星1では23.3%(14件)、星2では35.1%(13件)、星3で44.9%(22件)である。さらに星4では48.4%(30件)、星5では53.5%(46件)まで上がっている。こちらはカイ二乗検定で星1評価と星5評価に1%水準の有意差が認められる ($\chi^2(4)=20.502$, Cramer's $V=0.269$)。明確に右肩上がりだといってよいだろう。こちらも先にみたように、高評価の方がカスタマーレビューの文字数が多くなる傾向にあり、あらすじを含みやすくなる。主人公がどんな人であり、どんなことをしたのかを記述しているということがわかる。同様に、対になるであろう「アイドル」も似た傾向がみられる。高評価のときは3割弱の出現割合だが、星1だと10%(6件)、星2でも18.9%(7件)、いずれも上位20位には入っていない。星1評価に1%水準の有意差がみられた ($\chi^2(4)=9.463$, Cramer's $V=0.179$)。その他動詞の「生きる」もまた、主人公が生きるというあらすじに

関連している言葉について、点数が高いレビューで出現割合が増えている。星1評価に5%水準の有意差と、出現割合が特に低かった星2評価について1%水準の有意差が認められる ($\chi^2(4)=16.803$, Cramer's $V=0.239$)。

先の点にも関連して三つ目として、内容上重要であると思われた「障害」の頻度については、主人公やアイドルほど明確な傾向はみられない。星1評価では11.7%(7件)、星2評価で24.3%(9件)、星3評価で36.7%(18件)、星4評価で19.4%(12件)、星5評価では19.8%(17件)である。上位20位という点では星2評価と星3評価にしか含まれていない。カイ二乗検定では星1と星3にそれぞれ5%水準と1%水準の有意差が認められる ($\chi^2(4)=10.698$, Cramer's $V=0.191$)。同じくこちらにも内容的にもタイトルとしても重要である「推し」が基本的に上位にあり、1点評価と4点評価に1%水準の有意差が認められる ($\chi^2(4)=12.605$, Cramer's $V=0.207$)。特に「障害」については解釈しにくい。

	1点 60件		個数	割合	2点 37件		個数	割合	3点 49件		個数	割合	4点 62件		個数	割合	5点 86件		個数	割合
1	する	41	68.3%	ない	25	67.6%	する	40	81.6%	する	51	82.3%	する	66	76.7%					
2	ない	41	68.3%	読む	23	62.2%	ない	36	73.5%	推す	41	66.1%	ない	59	68.6%					
3	読む	36	60.0%	する	22	59.5%	読む	32	65.3%	ない	38	61.3%	推す	51	59.3%					
4	ある	29	48.3%	思う	18	48.6%	思う	31	63.3%	ある	36	58.1%	読む	48	55.8%					
5	思う	27	45.0%	推す	15	40.5%	推す	29	59.2%	なる	35	56.5%	主人公	46	53.5%					
6	推す	24	40.0%	ある	14	37.8%	ある	25	51.0%	できる	31	50.0%	なる	44	51.2%					
7	芥川賞	21	35.0%	芥川賞	14	37.8%	なる	22	44.9%	思う	31	50.0%	ある	43	50.0%					
8	作品	21	35.0%	主人公	13	35.1%	主人公	22	44.9%	主人公	30	48.4%	自分	41	47.7%					
9	ない	17	28.3%	人	12	32.4%	できる	20	40.8%	読む	29	46.8%	思う	39	45.3%					
10	内容	16	26.7%	なる	11	29.7%	人	19	38.8%	感じる	27	43.5%	できる	30	34.9%					
11	主人公	14	23.3%	自分	11	29.7%	発達	18	36.7%	自分	26	41.9%	作品	28	32.6%					
12	なる	13	21.7%	小説	11	29.7%	障害*	18	36.7%	人	23	37.1%	人	28	32.6%					
13	言う	13	21.7%	感じる	10	27.0%	作品	17	34.7%	理解	22	35.5%	生きる	26	30.2%					
14	本	13	21.7%	ない	9	24.3%	感じる	16	32.7%	いう	21	33.9%	感じる	25	29.1%					
15	いう	12	20.0%	感じ	9	24.3%	自分	16	32.7%	生きる	21	33.9%	描写	25	29.1%					
16	できる	12	20.0%	障害	9	24.3%	いう	15	30.6%	いる	19	30.6%	アイドル	24	27.9%					
17	感じる	11	18.3%	描写	9	24.3%	ない	15	30.6%	わかる	19	30.6%	ない	23	26.7%					
18	期待	11	18.3%				生きる	15	30.6%	アイドル	19	30.6%	描く	23	26.7%					
19	表現	11	18.3%				アイドル	13	26.5%	ない	18	29.0%	いる	22	25.6%					
20							芥川賞	13	26.5%	多い	17	27.4%	いう	21	24.4%					

表3 カスタマーレビューにおける星評価ごとの頻出単語

*3点評価の「障害」には「ADHD」という言葉も2件含めている

4. 「障害」に対するレビューコメント

内容やあらすじに関連するのであれば、評価が高い方が出現割合が増えるはずである。逆に、批判の対象として用いられるのならば、評価が低い方が出現割合が増えそうである。重要な言葉であれば常に上位となり、そうでなければ頻度は下がるだろう。「障害」という言葉はこれらのいずれでもないとすれば、どのように実際に評価されているのだろう

うか。具体的にレビューコメントを確認することにしよう。大きく3つのスタイルをみることができる。

一つ目は、自身や周囲に障害を持つ人々がいることを表明し、レビューを行うスタイルがある。このスタイルは高評価の顧客レビューに多く、低評価のレビューでは1件しかみられなかった。二つ目は、障害についての共感を語るというスタイルである。共感できるかどうか、あるいは記述として十分かどうか書かれている。このスタイルは高評価、低評価ともに多く、低評価の場合には、共感できない、記述が薄いとされ、高評価の場合には、共感でき、うまく記述できているということになる。それから最後はそれ以外のスタイルであり、主人公の説明としてだけの記述を中心に、その説明や解釈は行われていない。このスタイルも高評価、低評価ともに見受けられる。

「障害」について、積極的に本書籍にとっては主題ではないという指摘も星5評価で1件存在した。推しや追っかけは誰にでも起こりうることであり、昔からもあったとされる。純粋に推しに関する内容だけを評価できるということかもしれない。同様に、星1点評価ではあるものの、「障害」は辛いにしてもオタ活はもっと楽しいことを言いたいという顧客レビューや、「障害」の話なのでタイトルを変えた方が良いという星3評価の顧客レビューもあった。これらは、障害と推しを切り離して捉えているという点で同様の分類ができる。

5.発達障害と推し

本書籍が推しについてのストーリーであることはいままでのない。一方で、主人公が発達障害のような問題を抱えている設定であるとすれば、レビューでも言及されていたことから両者の結びつきを考えることには意味がある。

先の2つ目の投稿に示されていたように、本書において発達障害という設定は日常での生きづらさやコミュニケーションの難しさに関連している。これらは誰もが感じるであろう感覚でもあるが、発達障害であるということがその困難を際立たせる。星3評価の顧客レビューでも、障害に限らず、人間は大なり小なりほとんどすべての人が生きづらさを感じているとされていた。推し消費は、これらの問題の重要な解決策として位置付けられることになる。誰もが日常を生きづらく感じ、またコミュニケーションを難しく感じる時、アイドルを推すことは、日常からの離脱や、実名や身体を伴うコミュニケーションからの離脱も可能にするというわけである。

とはいえ、このように発達障害をあくまで推し消費の特徴や効果を際立たせるためだけに用意された設定だとみなすことは一面的な理解でもある。いくつかの投稿にみられたように、本書籍を推しや炎上の話だと思った人々からすれば、発達障害という設定自体がな

くても推しは際立つわけであり、余分な設定だったのではということになってしまう。題名を変えた方が良いということにもなる。

本書籍において、推しは燃え、やがて消えていく。こちらも投稿において紹介されているように、推しは最終的に普通の人となり、日常に戻る。燃えることはあたかも通過儀礼のようであり、その理由は何であれ、その過程を経て子供が大人になるようでもある。これに対して、主人公は発達障害という設定ゆえに普通の人となることはできず、それゆえに日常に戻ることもできない。当初、推しの存在を生きるための解決策として際立たせていた発達障害という設定は、ストーリーの終盤において推しというタイトルを乗り越え、むしろ主題として残されることになる。

どんどん一般人になっていく真幸と、どんどん普通ではなくなっていくあかりの対比が面白いというレビューからは、推しとあかりというだけではなく、推しと発達障害の関係が変化していく様子が読み取られていることがわかる。また、その先に長い長い道のりが見えるという書籍の最後の一文を引用している投稿もみられる。それは推しが消えた後の世界であり、自身が思うようにならない心身を抱えたまま生きていく世界ということである。

AKB 商法における新聞記事においても、推しが消えた世界をみることができる(水越, 2022b)。そこでは、推しは恨まれているわけではない。むしろ推しは自らを連れ出してくれた重要な存在であり、虚無感というよりは感謝されている。推し、燃ゆの世界においても、もちろん主人公は推しを恨んではない。しかし、だからといって自らが連れ出され、新しい世界や新しい日常に着地できたわけではない。

6.二つの病気

本書籍において、主人公あかりは「ふたつほど診断名がついた」と書かれている。このことが主人公は発達障害であるという解釈や説明に関連している。カスタマーレビューでは、この2つの障害名を類推するなどしている。また、そもそも明示されていないことが現実的であるというレビューもみられた。障害は必ずしも目にみえるわけでもなければ、特定の症状をみせるわけでもないからである。このことは、障害という設定が現代の人々に共通する生きづらさの象徴であるという理解にもつながる。

その中でも、星3評価のカスタマーレビューでは、2つ目の病気について言及し、それは依存症に近い推し活動のことであると指摘している。それ以上の説明はないが、発達障害と推し活動を2つとも病気であるというとき、両者は区別なく語られることになる。この指摘は、推し活動についての理解を深める上で重要であるように思われる。

推し活動は病気なのだろうか。もちろん、この病気という言葉が意味するのは鉤括弧付きで理解されるような「病気」であろう。確かにこのような理解は可能かもしれない。そもそも推し活や推し消費という言葉が登場する背景には、そうした行動が特別なものだという理解があったはずである。ファン行動や追っかけ行動は以前からあったが、こうした行動が新しい言葉で呼ばれるようになることには、何か新しさがあつたとみることができるだろう。

発達障害がスペクトラルとされ、様々な症状や程度があると考えられるように、推し活や推し消費もスペクトラルであろう。そして主人公あかりがみせた推し行動は極めて強い行動であり、それゆえに病気であるともみなされるということかもしれない。例えばアイドル関連のグッズを全て購入することや、複数購入することは、一種の収集癖とみることもできる。収集癖はアディクションとしても理解されてきた。

逆に、推し活動が病気ではないと考える展開もあり得る。この時には、障害もまた、「病気」ではないということになるだろう。こちらは今日の社会においてより重要な示唆を伴う。私たちの社会は、推し活動を受け入れることと同じように、障害を持つ人々も受け入れなければならないのである。

7.別のネット記事にみる病と推し活

障害と推し活を同時に議論するという点において、類似した記事が2022年7月8日のヨミドクターで紹介されている。小説とは無関係だが、話の内容はとても似ている。取り上げられているのは、ノートの字を何度も書き直す高1女子が診察を受けにきたという話であり、精神科医である武井明によれば、この強迫症状を忘れさせたのは「推し活」だったとされる。この記事に対して、2022年7月13日時点で124件のYahooコメントが寄せられており、91件が公開されている。

多くは好意的なコメントであり、自身もまた同様の強迫症状で困っていたという投稿や、推し活による解決を喜ぶ投稿がみられる。584件の最も多くのいいねを集めたコメントでは、こうした方法がもっと広まれば良いとされている。同時に、否定的なコメントもあり、22件はこの解決方法に少なからず懐疑的であった。

『推し、燃ゆ』を連想させるコメントとして、推しがスキャンダルを起こして引退したらどうなるのだろうかという疑問もあった。二次元のアニメであっても著者の問題などがありうるという。小説では、まさにこの問題に直面したことが描かれていたのであり、その中で障害だけが残る世界が最後のテーマであった。推し活による効果は一時的だという指摘もあり、これらも小説の世界を連想させる内容となっている。

懐疑的なコメントでもう一つ特徴であるのは、推し活もまた別の症状だということである。悪口をいいたいわけではなく、自身もなったからわかるという投稿もあった。この指摘は、やはり『推し、燃ゆ』へのレビューコメントでみたように、二つの病気の一つを推し活として捉える考え方である。この考え方は、必ずしも特異ではないことがわかる。Yahoo コメント上では、14 件は推し活も問題を孕んでいることを指摘している。さらに 3 件は、お金やビジネスとの結びつきに言及している。

8. 帰結

本稿では芥川賞受賞作品である『推し、燃ゆ』に対するアマゾン上でのカスタマーレビューの分析を通じて、推しに対する人々の理解や反応を確認した。特に注目したのは、小説の内容に描かれる主人公の障害と推し活動の関係であり、カスタマーレビューにおいても多くの評価を確認することができた。作者の意図はもちろん、読み手の理解という点においても、両者は関連づけて議論するに値する関係にある。この関係は、最後に追加で確認したウェブ上の投稿記事においても確認することができた。推し活がやがて消えていくものであるのかどうか、それとも障害と同じように残り続け、また問題を孕むものであるのかという点は、改めて考えるべき問題である。

水越康介(2022a)『応援消費 社会を動かす力』岩波新書。

水越康介(2022b)「推し消費の考察 AKB と TOKIO」東京都立大学大学院経営学研究科リサーチペーパーシリーズ、40。